建築ジャーナル

2015年
April
No. 1237
定価
900円＋税

第1237号
2015年4月1日発行
（月1回・1日発行）
1964年7月13日
第3種郵便物許可
ISSN 1343-3849

4

特集

3.11から4年 2
原発事故と建築家

原発事故現場20km圏内を見て
五十嵐太郎
浅子佳英
青井哲人
中川 純
芳賀沼 整
浦部智義

原発事故と弁護士
河合弘之

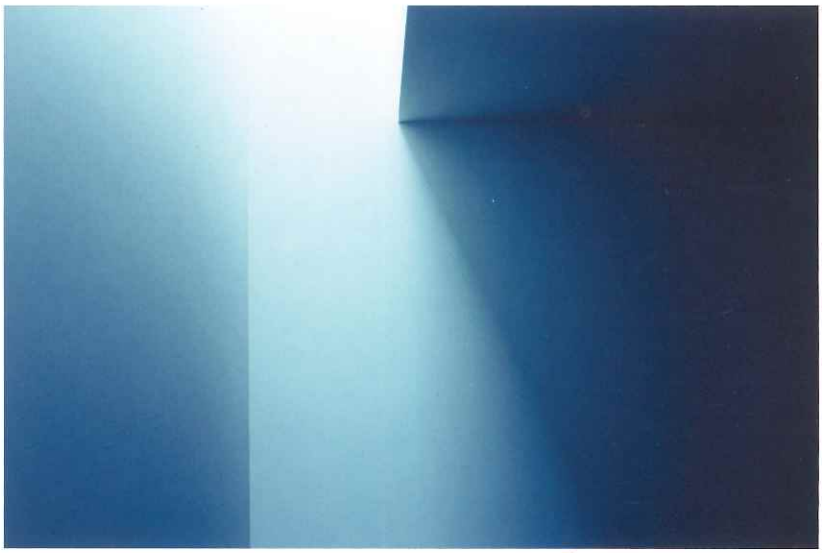
インタビュー
福島の現状から、
全国の建築家に訴える
辺見美津男

兼松紘一郎が巡る
建築家模様28
根路銘安史
沖縄の風土に
一魂を込めて

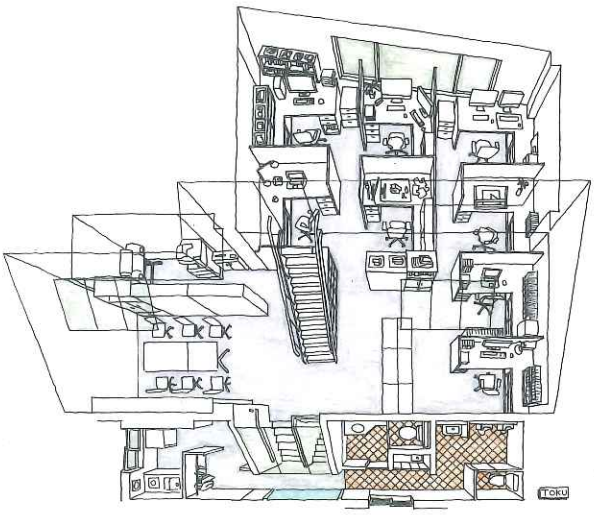
シリーズ 年間テーマ
戦後建築の70年

第4話
ニュータウンの夢と現実
団地と住宅公団の歴史から
村上 心

建築家をめざす若い人に
伝えたいこと10
林 泰義
地域内循環型の経済へ
知恵を出し合おう



【色・機能・形】……「静かな天窓」佐々木達郎



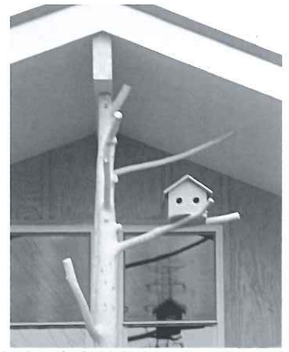
仕事場4
元・吉村順三設計事務所は
6人の建築家が
切磋琢磨するシェアオフィス
徳田英和／徳田英和設計事務所

各地域に
拠点を置く
設計事務所の
作品集
建築最新事情
建築集

渡辺治建築都市設計事務所
OSUMU WATANABE ARCHITECTS

外壁はラーチ合板、枝のついた柱は、至誠第二保育園の庭から寄付していただいた

高橋滋孝先生：現場に落ちていた端材で、さまざまなものをつくってプレゼントしました



屋根の下に集う、地域の父兄さんたち。昨年、私たちはインドネシアの農家を訪れた際、東洋の家は屋根でできていることを知らされた

万願寺保育園にこにこ広場

ある時に、高橋紘先生を入間のジョンソンタウンに案内した。
その時に、このように建ててくれないかと言われた。
大きな屋根でこどもたちが守られている安心感からか、これを皮切りに傾斜屋根や大きな庇で関東圏のきびしい環境を守る、いわゆる家形の建物を建てるようになった。
屋根の構造は、2×4や、サンドイッチパネル構造などを使用するので、屋根の中の空間全てが室内空間となり、自ずと大空間となる。大空間は床暖房と、換気によって、冬暖かく、夏は涼しい環境が得られる。
建設当時、敷地には、植栽がなかったが、東京都から芝生整備の補助金をいただき、芝生を植え、敷地周辺には、先生と一緒に、花壇づくりを行い、卒園生にも手伝ってもらい、花づくり、畑づくりと発展させていった。
その結果、フェンスにはマスクメロンがなり、花で囲まれた。この美化活動は周辺にも飛び火し、周辺住宅で花で庭を飾る家が増えた。

□東京都日野市／建築主：社会福祉法人至誠学舎立川／施工：住研工業／敷地面積：413.88㎡／延床面積：99.37㎡／W造／2010年　意匠担当：渡辺治、井上光

2階の空中庭：こどもたちはここを通って各々の住戸（ユニット）と行き来する。ここではバーベキューなどで交流できるようシンクがある　写真：永石秀彦

至誠 大空の家（児童養護施設）空とつながる家

この施設が実現するまで、東京都では計画があっても、住民反対を受けて建てられなかった。しかし、長い間児童養護施設を地元で運営してきた至誠学園が、住民説明会を行うと、反対する者がいなかったばかりか、
「子ども達の第二のふるさとにして欲しい。」と述べた方がいた。
住民と子供たちが一緒に活動できるように敷地の中に畑を設けられた。
畑にはたびたび、人が集まって畑に作物を植え、収穫して子供達によって近隣に配られる。施設が建てられてから１年、周辺のこどもたちも施設を訪れるようになった。

居住空間の２階３階は、中庭をはさんで、８人単位の家族（ユニット）構成になっており、３階が女子、２階に男子が住む。中庭を通じて、互いの気配を共有する。ストリート（居間）には、勉強空間、アイロンをかける場所、洗面、ダイニング、リビングなどが一体のスペースの中に配置されている。スタッフは親であり、こどもは一緒に食事をつくるように、キッチンには表と裏をつくらなかった。各子供の部屋には名前の表示がなく、その結果、ストリートの居間に向かって窓が連続しているが、そこに自分の作品や賞状を貼るようになった。

通常、キッチンの内側と外側を隔てる扉がある。ここではスタッフは親であるので、サービスする側とサービスされる側の隔たりをつくらなかった。左には、個室の扉と窓がまちなみをつくる　写真：永石秀彦

写真：永石秀彦

この建物でも、大きな庇＝「ひとつ屋根の下に住む」が重要なモチーフになっている。こどもたちは、普通のマンションのように、外部から各ユニット（家族単位）にアプローチする　１階にはこどもライブラリー、地域交流ホールなどがある

空から光をもらい、収穫し、地域とつながる家

至誠学舎立川は明治時代から児童養護施設を運営してきた。至誠学舎立川が、新しい施設を建てるとなると、至誠ファンから寄付が集まる。また、至誠学舎立川のバザーなどのイベント時には、ＮＰＯや大学など各団体、企業、地域に住む個人などがボランティアで集まり、千人を超える来訪者がある。社員がボランティアに来て、職員研修の場としているケースもある。

畑は回りの方達とこどもたちとで運営されており、何を植えるかもみんなで決める

居間側の個室の窓

上の階が女性のユニット、下の階が男性のユニットが配置され、光庭を共有し視線が交差する　写真：永石秀彦

社会の被害者とも言えるこどもたちを至誠学舎立川は 100 年も前からあずかって、親代わりを勤めてきた。現代では、被災地からのこども、DV を受けたこども、親が離婚し扶養者がいなくなったこどもなど、不幸なこどもたちは多様化しており、ますます児童養護施設への要求は高まっているにつれて、職員研修・教育の必要性も高まっている。至誠学舎立川はめまぐるしく忙しい

□東京都日野市／建築主：社会福祉法人至誠学舎立川／構造設計：リズムデザイン（中田琢史）＋メタストラクチュア（原田玄）／設備設計：三高設計（三島行雄）／施工：砂川建設／敷地面積：1,154.23㎡／延床面積：1,150.64㎡／ RC 造／地上３階／ 2013 年　意匠担当：渡辺治、斉藤絵里　サイン担当：野仲弘一　美術担当：坂本紀恵

至誠学舎 まこと館 至誠保育園保育支援・研修センター

まことの心のはたらきは人の心をうごかし天に通ず

いまとなれば、社会福祉法人は、関東圏だけでも千を超えるまでになった。「福祉」という単語は、私が調べられる範囲では、戦後の憲法に始めて登場し、25 条によって「福祉」は国の義務となる。それまでは、「福祉施設」と名付けられる施設は皆無だったのである。

この建物は、数多くある保育施設の保育支援・研修センターとしてつくられた。至誠学舎は明治時代に、2人の少年をあずかり更生させたことから、児童養護施設を運営するようになる。昭和憲法以前の「福祉」が国の義務ではなかった時代、自分たちで運営資金を集めていたが、皇室の目にとまり、御下賜金をいただくようになる。その時に、皇室からいただいた厨子や観音像なども展示されている。

この敷地には、大正時代に皇室からいただいた「御鳳輦舎」と名付けられていた東屋が建っていた。一部、柱材や棟飾りなどを再利用させていただいた。

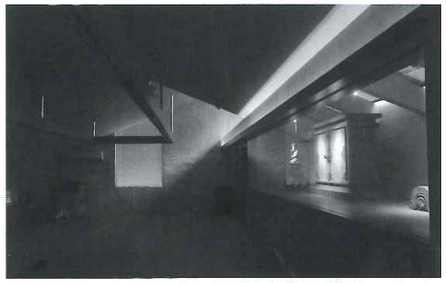
創設者稲永久一郎氏の娘達は各々が素晴らしい伴侶を得て、児童養護、高齢者介護、保育など、福祉活動を行うようになる。

皇室からいただいた「御鳳輦舎」のレプリカ。オリジナルは消失した

高橋利一理事長と渡辺：かつてここから多摩御陵を向いて朝礼を行っていた

「御鳳輦舎」の破風飾りに、東京ガラス工芸研究所に依頼し、中世色のガラスをはめていただき、それを入り口の扉にはめ込んだ。
入り口両側の丸柱も同建物の部材を使わせていただいた　写真：永石秀彦

創設者：高橋久一郎とヨシ夫人

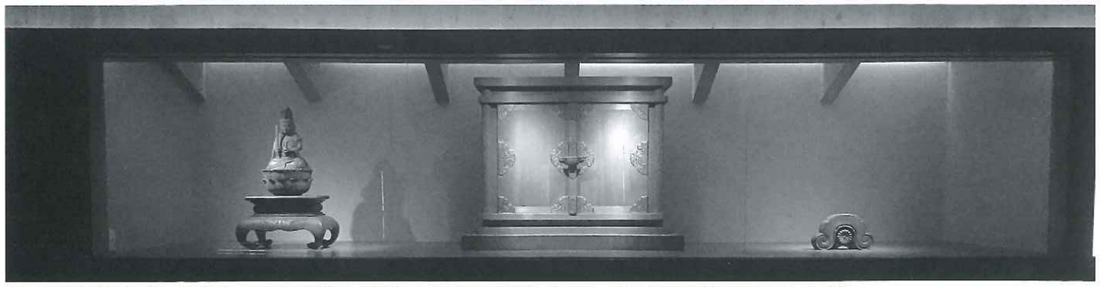


写真：永石秀彦

建物は、至誠保育園の保育、研修施設として建てられた。敷地は、「御鳳輦舎」があったことから、皇室のゆかりがある品々を置いた

写真：永石秀彦

階段の最初の２段は敷地の樹木を伐採した時のもの



大正天皇からいただいた品々が展示されている。上からの光は自然光で、紫外線カットガラスとよしずで光をしぼっている。床板は大判で木目が美しいロシアンパーチを使用

□東京都立川市／建築主：社会福祉法人至誠学舎立川／構造設計：リズムデザイン＝モヴ／設備設計：三高設計／施工 :YAZAWA LUMBER ／敷地面積：272.66㎡／述床面積：214.72㎡／ W(軸組) 造／地上 2 階／ 2014 年　意匠担当：渡辺治、川合麻美、柳文相　サイン担当：野仲弘一　美術担当：坂本紀恵

道行く人に覆い被さるように庇は大きく、その下のガラスの風除室は展示空間となる。小鳥の巣箱は、保育の象徴として作られたが、毎年、実際に小鳥が巣をつくって子供が巣立っている　写真：永石秀彦

街灯がない街路にこどもの家が浮かび上がる　写真：永石秀彦

屋根裏部屋の事務空間からホール部分を望む　写真：永石秀彦

至誠第二保育園 こどもの家

日野市の、至誠第二保育園の向かえの敷地に建てられた。ここでは、ダンスや英会話などの習いごとや、地域のひとたちの活動の場、子育て支援の場として使われている。

保育園では、日曜日以外は保育がされているので、地域の人たちが入り込む余地がなく、このような施設ができることによって、地域との接点ができただけでなく、保育の内容に広がりができた。

髙橋紘先生は、日野市で至誠第二保育園の園長を勤めていたが、待機児が大勢いることを知り、万願寺保育園、いしだ保育園、太陽の子保育園、あずま保育園と保育園をつくって熟練のスタッフをそれぞれに配置してきた。それにつれて職員の研修や地域との交流の場の必要性を感じるようになり、このような施設を独自につくることとした。

サンドイッチパネル工法（工事中）

毎年ことりが巣立つ

屋根は梁はなく、柱にも支えられていない。２×４の根太に上下15ミリの合板ではさんだ、パネル構造で、段ボールを折ったような構造としており、大空間を獲得することに成功している。在来の木造では、柱間を２～2.5間を飛ばすのがやっとであるが、このような構造形式をとることによって、木造住宅をつくる施工者でも、体育館的な大きな空間をつくることができる。

左から：髙橋紘先生　嶋田友美先生　三浦修子先生

□東京都日野市／建築主：社会福祉法人至誠学舎立川／構造設計：リズムデザイン＝モヴ／設備設計：三高設計／施工 : 砂川建設／敷地面積：469.00㎡／述床面積：232.26㎡／ W 造／地上 2 階／ 2012 年　意匠担当：渡辺治、川合麻美　サイン担当：野仲弘一

入り口には風除室はなく、バリアフリーで室内に入る。室内からはハイサイド窓やトップライトから空を望むことができる。欄間窓からは風が通る。森の中のイメージ　写真：永石秀彦

アビリティーズ　デイセンターつどい奈良北

補償よりも働くチャンスを

UR（元都市公団）の団地は、厚労省の規定である「サービス付高齢者向け住宅」に合致していないので、URは、独自に高齢になっても安心して住める「高齢者向け みまもり住宅」の規格をつくり、障害・高齢になっても住み慣れた家に住み続けられるためにデイケアセンターを余った駐車場に建設し運営するよう日本アビリティーズ社に依頼した。

日本アビリティーズ社の伊東弘泰会長は、大学卒業時に、100社以上の企業から障害を理由に就職を断られ、自分で会社をつくることになった。伊東会長は「日本にはまだ、障害者差別禁止法がない。差別してもよい先進国は日本だけなのだ」と出会ったときに語っていた。今は努力のかいがあって、昨年、国会で「障害者差別解消法」が可決するに至り、大きく前進した。

ある時に、伊東会長は、差別のない世界を見ないとだめだ、と言って、アメリカの施設を案内していただいた。そこには、障害者にも、高齢者にも、ポジティブで、明るい未来が開けていた。

伊東会長からは、暖かく、気軽に入ってきたくなるようにと頼まれた。

障害者や高齢者とのバリアーがない施設が意図された。巣箱とサインは坂本紀恵作　写真：永石秀彦

非団地な空間をつくって欲しいとの要望に応えて、内部に「いえ」のファサードと自然の断片を持ち込んだ

地域の方たちの活動の場所としてつくられた部屋。

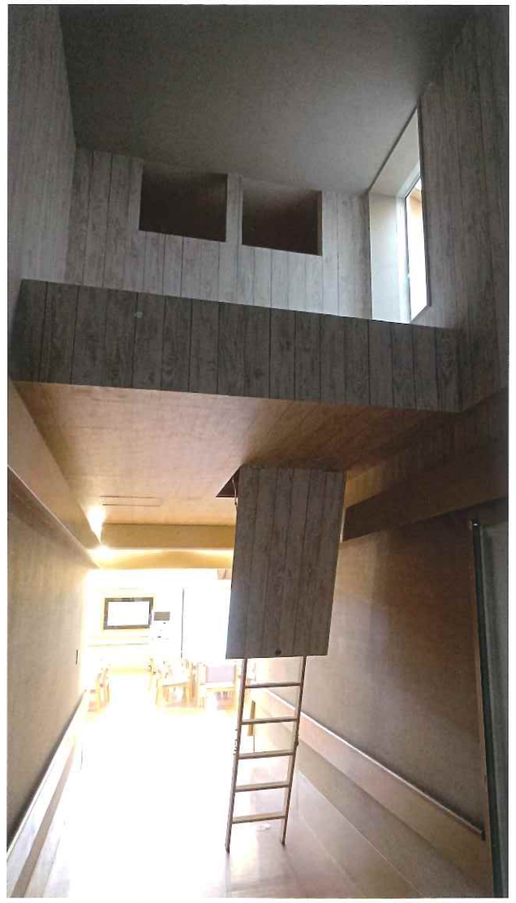
躯体は、再利用ができるよう、また海外の技術でも製作が可能なように、ボルト締めのみで作れる構造体とした。鉄骨の工場で、溶接は、熱による変形を予想しながら手作業と勘で行う作業であることを知らされた。溶接をしない構造体にすることで、ボルトの数は千箇所を超えたが、単純作業なので、ストレスはなかったと言う。

東日本大震災、職人不足により、建築費が高騰している中、専門職を必要としない構造体を考えるようになった

住民説明会で、アビリティーズの理念を説明する伊東弘泰会長。大きな期待が寄せられた

アメリカのアビリティーズ社の創設者ヘンリー・ビスカルディさん。ベトナム戦争で障害者となった仲間と会社をつくった

写真：HARATIO ALGER ASSOCIATION, Home Page



屋根裏には、備蓄倉庫がある

□神奈川県横浜市／建築主：アビリティーズ・ケアネット株式会社／構造設計：リズムデザイン（中田琢史）／設備設計：三高設計（三島行雄）／施工：砂川建設／敷地面積：1,794.64㎡／延床面積：243.73㎡／S造／2013年　意匠担当：渡辺治、大澤裕美、沖永理恵　サイン担当：野仲弘一　美術担当：坂本紀恵

3階には、こどもたちのライブラリー＋ワークスペースがあり、上の窓から吹き抜けを通じて公園を一望する。下の窓は、待ち合いカフェスペース、ルーバーは、居住空間のプライバシーを守り、光を導入するルーバー

あおばこころのクリニック

地域のこころの避難所

坂ノ上先生は、かつて設計した清水駿府病院の医師のひとりだった。今も同病院では働きながら、独立して、自分のクリニックも運営しており、ウツや痴呆など、こどもから高齢者まで気軽に相談に来れる環境をめざしている

こどもが生まれてから、家には沢山のこどもが来るようになり、貸しビルの2階の現在のクリニックを近くの公園前の敷地に移すことにした。

待ち合いは、限りなくカフェのように気軽にこころを休める空間としたい、建物の壁に、「こども避難所」の表示もつけたい、周辺のこどもたちも気軽に入ってきて、みんなで遊んだり、勉強する空間を提供したい、と若い夫婦の希望があり、3階にはこどものライブラリースペースも設けられた。

坂ノ上政綱先生家族

1階のクリニック空間。暖かい光で包まれる空間を意図している

坂ノ上先生が好きな柚木沙弥郎氏の作

上の窓がこどもライブラリー。左の大きな窓を通して公園を望むことができる

□静岡県静岡市／建築主：坂ノ上政綱／構造設計：中設計（中雅雄）／施工：静岡鉄道建設・プレイントラスト／敷地面積：206.47㎡／延床面積：353.05㎡／W造／地上3階　意匠担当：渡辺治、山崎智貴